

■ 常染色体量的因子の遺伝パターン

このパターンにあたる、犬の遺伝性疾患

・VWD（フォンビルブランド病）

クリア

病因遺伝子変異が検出されない場合で、その遺伝子変異が原因である病気にはならず、またその病気を発症する変異を後代に伝達しません。

ヘテロ接合

病因遺伝子変異が1つしか検出されませんが、父親側と母親側の両方の遺伝子が発現（活動）するために、どちらか由来の病的因子と他方の野生因子（ノーマル）の両方が働き中間的な病状ないし環境依存的発症などを引き起こします。基本的に片方でも発症するため“偽優性”とよばれることもあります。（図1参照）

症状があらわれている場合は、かかりつけの動物病院での受診をお願いします。

繁殖において、他の個体と掛け合わせると発症性の組み合わせの子供ができる可能性があることに留意しなければいけません。

ホモ接合

2つの病因遺伝子変異が検出される場合で、完全なあるいは重篤な症状を発症する可能性が高い。症状があらわれている場合は、かかりつけの動物病院での受診をお願いします。

繁殖において、クリアの個体と掛け合わせた場合でも、すべての個体がこの病的因子をひとつもつヘテロ接合体となるため中間的な発症を呈する可能性があります。

図1 遺伝子は、父親と母親からそれぞれ受け継いだものがペアになっています。右図のように片方に変異（病的多型）を持っているヘテロ接合でも、アフェクテッドとなります。この場合は、因子の強さに見合ったさまざまな程度、つまりホモ接合との中間的な程度の発症をする可能性があります。

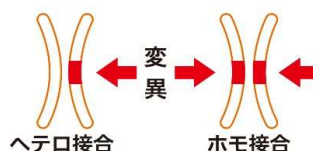


図2

